

星 屑

No. 137 Apr. '86

ハレ彗星 Watching AGAIN

...最南端の島に住んでいるのだから!...

去った3月9日(日)に「ハレ彗星ウォッチング」を催しましたところ、100名余の方々がお集まり下さいました。肉眼で、また望遠鏡や双眼鏡を通してハレ彗星の神秘的で華麗な姿を心ゆくまで楽しむことができたと思います。「しう一度ウォッチングをやってほしい」という御要望にお応えしまして下記の通り「ハレ彗星ウォッチング アゲイン」を企画しました。もし良かったらおなほしいしに御覧になりませんか!

日時：S61年 3月16日(日) 4:30^{AM}~6:00^{AM}頃

場所：学校運動場

- *天気が悪い場合は、①3月21日(金) ②3月23日(日)と順延します
- *中学生以下は大人同伴で参加して下さい
- *土星、火星も観えます
- *南十字星の見つけ方や星座の話もありません

連絡先： 波中 安田



日本最南端でハレーを！

吉田 健二

「今度の春の合宿は、日本最南端の波照間島に行って、ハレー彗星を見よう。」という話が、我々、熊大天文研究会に出たのは、1年前のことでした。まず、先立つものは何と言ってもお金です。この1年、各部員はそれぞれ、アルバイトに汗を流して旅費を貯めました。そして、今まで何も器材を持たなかった我々のクラブは、カートンのスーパーノバ赤道儀や15cmドブソニアンの主鏡と斜鏡を購入し、また、各人も赤道儀や双眼鏡などの器材を整えました。その他、キャンプ用品などを買いそろえ、我々が波照間まで持って行く器材は、赤道儀5台、15cmドブソアン、双眼鏡、キャンプ用品、テントなどとなり、各人20～30kgの器材を運ばなければならなくなりました。そして、出発の日までいろいろと準備に追われる毎日が続きました。

3月8日、いよいよ出発の日です。レンタカーに荷物を詰め込み、PM2:00部室を出発。これから始まる合宿に向けての期待と不安を胸に、3号線を北上します。PM10:00博多港発の船に乗船し、一路、沖縄へ向けて南下します。船の上での天気は快晴で、双眼鏡の視野いっぱい尾をひいたハレー彗星を見ることができ、波照間島でのハレー彗星の観測に期待がもたれました。

10日のAM6:00に那覇に着き、石垣島への船が出る翌日のPM8:00までの2日間は、沖縄本島の観光に当てました。我々が、波照間まで飛行機で行かなかったのは、お金の問題もありますが、船で行くと観光ができるということもその理由の一つでした。1日目は、58号線を北上し、万座毛、名護市、海洋博記念公園と主に沖縄本島中北部の観光を行いました。58号線を北上中、急に視界がひらけて見えた海の青さ、砂の白さには驚き、思わずカメラを向けていました。2日目は、沖縄の歴史を学ぼうということで、南部を中心に姫百合之塔や旧海軍指令部壕などを見て回りました。そして、その夜、石垣島へ向けて那覇を後にしました。石垣島への船の中で寝ていると、だれかにたたき起こされ、甲板に出て行き空を見上げると雲一つなく水平線近くまで晴れわたっています。さそり座は、すでにのぼっており、見上げるくらいの高さにあります。その横には、土星と火星が輝いています。そして、ハレー彗星のあるべき位置へ目を移していくと、そこには、何かボヤッとしたものがありました。そうです、ハレー彗星です。尾までもはっきり見えていました。目の悪い自分にとって、こんなにはっきりと尾まで見えるとは思ってもみませんでした。

12日早朝、船は宮古島に寄港しました。その停泊中に、砂山ビーチまで行くことになりました。途中、人頭税石に寄り、砂山ビーチめざしてひたすら歩き続けました。しかし、出港までの時間がなくなり、途中で断念することになりました。

12日PM3:00石垣島着。この石垣島での宿は、南国特有の赤瓦の造りで、田舎の暑気があり、今までほとんど船の中で過ごしてきた我々にとって、大変くつろぐことができました。その夜石垣市内をぶらついた後、これから始まる10日間のキャンプの不安を胸に、床につきました。

13日AM8:30石垣港離島棧橋より、波照間島へ向けて出発しました。竹富島や西表島などの島々を望みながら船は、日本最南端の島へ向けて南下していきます。約3時間の船旅でした。今までの30時間や15時間の船旅に比べると短いものです。AM11:20波照間島着。さっそく頼んでいた民宿の車に荷物を詰め込んでキャンプする場所へ向かいます。キャンプ地は、島の南側の海岸です。この海岸は、5~10mの断崖で、砂浜はほとんどありません。そして、このためか海の方からけっこう強い風が吹いていました。キャンプ地へ着くと、すぐにテントを張りました。ビニールテント2張り、ドームテント1張り、布テント1張りです。テントを張り終わった頃には、もう夕方近くになっていたのので、夕食の準備にとりかかりました。最初の食事のメニューは、石垣島で買い込んだラーメンとご飯です。だれもカソリンコンロで米を炊いたことがない上に10人分という多量の米を炊かなければならなかったのので、炊き上がったご飯は、芯が残っており、これを食べるにはかなりの根性がいました。その後、数回、このようなお飯が続いたのは事実です。この夜は、天気が悪く、みんな疲れているようだったので早目に寝ることとなりました。そして、テントの中でガヤガヤ話してそろそろ寝ようとしたときに思いもかけないことが起こりました。“だんご虫”の襲来です。1びきではかわいいあのだんご虫が、ぞろぞろとテントに登ったり、テントの中に入ってきたりしたのです。特に布テントはひどく、テントをたたけば、だんご虫がばらばらと落ちてくるぐらいでした。とてもこの中で寝ることなどできない状態でした。そこで急ぎよ、この布テントにいた1年生は、他のテントに移り、このテントは器材を置くことになりました。

次の日は、うす雲が広がっていましたが、それでも手足が赤くなる程でした。そして、いよいよ、この日から毎日島の中心部にある集落まで、水くみや食料の買い出しに行かなければなりません。集落まで約2Kmあり、道の所々にはヤギが繋がれています。この道を18ℓのポリタンクを背負って歩いていきます。行きはタンクが空なのでよいのですが、帰りにはこのタンクが満タンになり、18kgの水を背負わなければなりません。これは、思っていたより大変なことでした。そしてこのために、足腰がきたえられたのは、いうまでもありません。この島には、島の大きさや人口の割には、商店がかなり多いので、食料の買い出しにはそれほど不自由しませんでした。それに、島が小さいためか、我々がキャンプをしているといううわさが広がっており、ポリタンクを背負って、村の中を歩いていると島の人からいろいろと声をかけられ、野菜などをよくもらいました。中でも、毎日、我々のキャンプしているところへ来ては、野菜などを置いていき、そして時々、ビールなど

を持って来てくれた島の人には、大変お世話になりました。この人には、島の信仰やその他いろいろな話をしてもらいました。

波照間島で、唯一楽しみにしていたことは、何といても泳ぐことです。しかし、予想通りというか、予想外というか、曇の天気が続き、気温がなかなか上がらず、あまり泳ぐことができませんでした。泳ぐことができたのは、わずか1日だけでした。そこで、泳げない日は、島の中を見て回りました。周囲14kmの小さな島ですが、とても1日では歩いて回ることはできません。だから、今日は北部、今日は西部というふうに回りました。島を歩いていて気づいたことは、ヤギの数がとても多いということです。道のわきのいたるところにつながれていました。それに当然といえば当然といえるかもしれませんが、さとうきび畑が多いということです。

さて、ハレー彗星の観測の話に移りたいと思います。波照間での天気は、こちらの梅雨の前のような天気です。どんよりとした曇で、時々晴れ間が広がるというようなものでした。そこで、いつ晴れるかわからないので、毎晩、テントごとに2時間半交代で、見張ることになりました。だれかに「晴れてるぞ!」とたたき起こされていろいろと準備をしていると曇り、曇ったのでテントの中で寝ていると晴れるというようなことのくり返しでした。そんな中で、唯一観測できたのは、16日の朝でした。午前5時半ごろ起こされ、前夜準備をしていたので、ねぼけ眼であったにもかかわらず、15分程で赤道儀をセッティングし、空が白み始めた中で写真を2枚撮りました。結局、我々が波照間でハレー彗星を観測できた時間は、9晩のうち1時間にも満たないものでした。「○○のせいだ」と雲男のなすり合いがあったのは、いうまでもありません。

22日に波照間島を出た我々は、23日から25日までの3日間、石垣島を拠点として八重山群島を観光しました。ここでは、自由行動となっていたので、自分は4人で西表島、石垣島、竹富島を回りました。他の人は、スキューバダイビングをしたり、西表島を縦断したりしました。

26日に石垣島を出発し、翌日の朝那覇に着くとすぐにみんな国際通りへ出かけ、おみやげを買うために何回も国際通りを行ったり来たりしていたようです。そしてその夜、かねてから予定していた通り、波照間では口にすることのできなかったステーキを食べ、その後、クレープやブルーシールアイスクリームなどを食べ歩き、沖縄での最後の夜を今までのうっぶんを晴らすかのように、思いっきり楽しみました。そして、28日の朝、沖縄を後にしたのです。熊本に着いて熊本の町並みを見た時には、「やっと帰って来たんだ」という思いでした。

今回の合宿は、予定していたハレー彗星が思うように観測できなかったけれども、それ以外に、予想以上のいろいろなことを見たり、体験したりできたので、きつかったが大変充実した22日間だったと思います。日本最南端の島、波照間島は、人も自然もいいところですよ!

波照間でのTV取材のこと

福岡 昭彦

熊大天文研究会がハレー彗星を歓迎する為に波照間まで行ってしまったのは、調存じの方も多いと思います。(星屑3月号)実はその時、私達はテレビに出演してしまいました。何故、私達が東海TVの取材を受けることになったのか。4回生の渡辺さんのおじさんが東海テレビで、『テレビ博物館』という番組のプロデューサーをやっているとかで、それで話が伝わってこんなことになったようです。

まず、撮影はレポーターの川津祐介氏と岩本尚子さんを波照間空港で出迎えるところから始まった。みんな緊張して入れ替り、立ち替りトイレへと足を運ぶ。冗談を言っても何かいつもと違う。顔がひきつってしまふ。飛行機が着き、川津氏と尚子さんが降りて来た。そこへ私達が出ていって「ようこそ」、「よろしく」と握手を交わす。さすがにTVに出ている女性、やたらと明るい。昼の撮影はこれでおしまい。夕方になってTV局差し入れのトンカツ弁当を食べる。トンカツ=肉、ああ、なつかしい響き。包みを開けふたを取ると、カツ、カツ、カツの量が多い。気の所為かトンカツがにじんで見える。TV局って何っていい奴なんだ。隣のテントからも歓声が上がっていた。夜の撮影は1:00AMからというので、それまで寝ておこうとすると、近くにテントを張っていた京都からハレーを見に来られた社会人の2人連れが訪れて来た。それで、不謹慎にもアルコールを帯びてしまった。2人が引き揚げたあとまだ少し時間がある。何様にして撮るのだろうか。インタビューされてうまく答えられるだろうか。横になっても寝むれない。しばらくしてTV局の人達がやって来た。外は霧雨が降っている。撮影用のライトがつけられるとまるで昼間のような。スタッフの人達がいそがしそりに動いている。セッティングの間、岩本尚子さんを囲んで雑談。しかし、ただの雑談ではない。この後撮る座(雑)談会の為の下調べ。この時は割と素直に言葉が出た。みんなも自然に話している。本番もこんな感じだったらいいな。と目の前の女性を見ながら考えていた。しばらく話していざ本番。ライトがテント内を照らし、カメラが回る。私の座っている所は写らないではないか! 尚子さんが「おじゃまします」と入ってくる。6人用テントに11人、かなり窮屈である。最初のほうで彼女が大袈裟に笑った。彼女が何か話すと、これはさっき話していたあのことを言って欲しいんだな。と考えてしまう。そうすると自然な言葉が浮かばない。彼女が質問で誘導し、セリフを話すように答える。尚子「76年後のハレー彗星まで生きていたら何処で見たい?」「また、波照間で見たい」さっきはここで、宇宙船から見るといいう話が出たな。あれっ、誰も言わないな。それでは、「宇宙から見たい」尚子「それなら、その時、私は宇宙船の中から『こち

らがハレー彗星です。』でやってるのかな。」地球上は宇宙かな。地球を宇宙船に例える事もあるな。それなら、今回も宇宙で、宇宙船の中から見ていることになるのか。取り止めの無いことを考えてしまいセリフが続かない。そのうち座談会は終わり、やたらと明るい照明の下で観測風景を撮る。それも終わり、芳野部長のインタビューと、彼によるハレー彗星の撮り方教室。その間、私は一人でハレーを見ていた。（この日ここでハレーを見たのは私だけ）京都から来た人達、この明りでは写真撮れんやろうな。撮影が一区切りついてライトを消した時にはすでに曇ってしまってハレーは見えなかった。

それにしてもTV局って好加減である。行き当たりばったりという感じがする。望遠鏡を持ってきても、使い方はこちら任せ、マイコンスカイセンサーを突然操作しろと言われてもマニュアルがないと解らねないか。それに、最初は観測の邪魔はしないと書いていたのに。撮影が長引いて、ハレーの写真撮れんかった。川津さんにもハレーを見てもらいたかった。波照間での天候がすぐれず、数少ないチャンスだったことを考えるとなんか、腹が立ってきた。でも、まっいいか。取材料はもらったし、TV出れたし、なんといっても、打ち上げでの日本食が旨かったし、ただ、この時、天候を気にせずに飲みたかった。

波照間島でもハレーブーム

芳野 浩之

実は、なんとノ星屑編集委員特集でおおくりしている今月号ですが、さてさて私のテーマは「波照間島でもハレーブーム」と題して、東シナ海に浮かぶ孤島—日本最南端、波照間島での以外なハレー熱について、お話をしてみましょう。

まず、話は今年の春にもどって、私と福岡君（同じく編集委員）の“南十字星と八重山諸島への旅”から始まります。（詳しくは星屑127号参照）この時、私達は波照間島も所属する沖縄県八重山諸島の一角、小浜島へ行ってきたのですが、この時のカルチャーショックというものがあまりに強烈だったことを覚えています。小浜島民の方にはおこられるかもしれませんが、物にあふれている私達には、信号機もなければ舗装路もなく、テレビはNHKだけで、ひたすらさとうきび畑の広がるこの島での生活というのは考え難いものでした。そして、このような経験を踏んでの今回の波照間行きでしたから、私達の予想は、まず天文などやってる人はいないだろう…。いや島に天体望遠鏡なるものが入るのは、波照間島にとって画期的なことではなかるうか…。とか、もし島民の方に望遠鏡で星などをみせてあげたらびっくりされるだろうな—なんて自分勝手な推察をしていたのでした。（波照間のみなさん、ごめんなさいネ）ここまで書けば今年の私達のカルチャ

—ジョックというものがわかり頂けたでしょうか？

ところが、ところが、波照間島でもハレーブーム、島あげてのハレーブーム、てなわけで子供から大人までが、ハレーについて語っているのを知り、まず驚き、そして感心、最後はこんな町光もない暗い空でハレーはもちろん、本土では見ることのできない南の星々を見れていいな—という思いが強くなっていくのがわかるほどに、彼らのハレーへの関心にはびっくりしました。道ゆく商店のおばちゃん達が、私達をハレーを観測に来ている者と知ってか（せまい波照間．．うわさがうわさと呼んでか、初対面の人でも私達が何者であるかを知っているのには、うーんさっすが、はなれ島、こんなところがおもしろいぜっ／＼って私は思うのです）ハレーについて話かけてきて、“昨日は早起きして見たけど雲で見えなかった”とか“あなた達が来る2・3日前まではとても天気がよくてハレーはよく見えていた”とか“昨晩は曇ってたけどハレーは見えましたか？（私達が雲のすきまからかすかに見た、と言うと）えっ／＼ほんとと．．それじゃ明日の朝みよう．．（そして、店の中にいる自分の娘を呼んで）今日の朝、ハレー見えたってよ！”こんなふうに、そのおばちゃん達のハレーへの関心は目を見張るもので、又そのようなわけでおばちゃん達とも友人になれて、食料の野菜からスイカまでがっほり頂いたし、ほんとにお世話になった波照間のおばちゃん達でした。

私達のキャンプ第3夜、突然私達のキャンプ地にさとうきびを持って現われた波照間島青年会の二人の男性にはおどろかされました。彼らが持ってきたものはさとうきびに加えて、カートンのミ=6風の望遠鏡。彼らが言うには、今日から私達といっしょに明け方ハレーを観測すること。（実際キャンプ中に雲のためハレーはよく見えなかったものの、彼らが私達の目覚し時計になってくれていたのは、事実かな—？）その彼ら、潮の満ち干きによる天気の変化などにもくわしいようで、やるね—って感じでしたね。それに私達はまだだれも見なかったハレーの石？を彼らに見せてもらえたし．．．．これに関する詳しい話は熊大天研まで．．．

そんなわけで、以外な波照間島でのハレーブームにおどろいて帰ってきた私達ですが、最後に、おもしろいものをお見せしましょう。表紙のポスターですが、これは、島のいたる所にはられていたもので、「ハレー彗星ウォッチング」のポスターなのです。内容からもおわかりのように私達が波照間へ入島する以前の3月9日にもこれは催されたようで、島のたくさんの人達がハレーを見られたようです。この「ハレー彗星ウォッチング・アゲイン」が催される前日に、子供たちが自分の先生に、明日晴れるかどうか、明日ハレーがもう一度見れるかどうかをしきりに聞いていたことが思い出されます。

インフォメーション

☆総会の日時が下記のように決まりましたので、ふるってご参加下さい。

日時：5月25日(日) 13:30～

場所：熊本博物館

☆「ハレーすい星観測データ集計用紙」を同封しました。これにみなさんが、これまでに撮られた写真のデータをご記入していただき、総会の日までに博物館へご持参していただくか、郵送していただきたいと思います。

編集後記

☆今月は、ほとんどというより完全に熊大の波照間合宿の特集となってしまいました。そこで、だれに記事を頼もうかということになったのですが、いつもは編集を行って記事を書くことにはほとんど縁のない3人で書くこととなったのです。なにせ星屑の記事を書くのは自己紹介以来なので、大変苦労し、やっと原稿を仕上げたしです。(YOSHIDA)

☆今度、始めて星屑編集をさせていただきました富永です。とは言っても、ほとんど吉田さんにかせっきりだったんですが……

合宿期間の沖縄は天気が悪く、合宿での最大目的であるハレーはほとんど見る事ができず、見れたとしてもほんのわずかな時間で写真を十分に写すことができませんでした。しかし、観光やキャンプを十分に楽しむことができ、一応、合宿は成功したと言っていいでしょう。

(TOMINAGA)

熊本県民天文台機関誌「星屑」 1986年4月号 通巻137号

発行所 熊本県民天文台 〒861-42 熊本県下益城郡城南町藤山

TEL. 0964-28-6060

熊本県民天文台事務局 〒860 熊本市古京町3番2号 熊本博物館内

TEL. 096-324-3500

編集担当 YOSHIDA/TOMINAGA

